



六花 1

俳句雑誌りつか
2018（平成30年）
cover design ichigo

い一枚の賀状も出さず去年今年
 ろ老眼に俯瞰はやさし初景色
 は初鴉呵々呵々かうと笑ひけり
 に人間は曆に歳を取りにけり
 ほ蓬萊の山に日の出を疑はず
 へへつつひに煮こぼしてゐる小豆粥
 と年寄の目耳若水にてみそぐ
 ち中年といふは昔よおらが春
 り栗鼠は籠回してゐたる去年今年
 むぬばたまの初夢に句を詠みしはず
 る留守電に酒控へよと初電話
 を遠近に正月風の競ひけり
 わ藁燃して三日暮るるを惜しみけり
 か数の子に金箔振つてありにけり
 よ夜更ても花札父の賀客かな
 た襷がけ鴨鍋の炭継ぎくれて



れ 礼 服 の 初 詣 な り 古 稀 余 年
そ 素 養 あり 流 る る ごと き 歌 留 多 読 み
つ 鶴 の 軸 背 に し 上 座 の 初 句 会
ね 子 の 日 の 松 日 岡 の 山 に 来 て を り ぬ
な な み な み と 御 酒 供 へ ある 恵 方 かな
ら 欄 干 に お 降 り あ と の 日 当 たり ぬ
む 六 日 目 の 齒 ぐ き 鍛 へ て を り に け り
い 牛 の 背 に 湯 気 立 つ て ゐ る 大 旦
ゐ ゐ の 中 の か は づ も 下 戸 も 睨 み 鯛
の 野 の 果 て は 二 神 山 の 初 霞
お 奥 山 の 御 降 り 晴 る る 嶺 祝
く 草 摘 み を 子 ま ご に 引 か れ 野 へ ま ぬ る
や 安 ら かな 川 を 渡 り ぬ 初 詣
ま 漫 才 の 二 人 に 畦 の 暮 れ に け り
け 削 り 花 木 の 香 満 ち ゐ る 二 の 座 敷
ふ 福 笹 や 千 木 に つ が ひ の 鳩 昏 る る



こ 混浴といはれて足の初湯かな
え 映画館はしごで過ごし三が日
て 天井の裏社会なる嫁が君
あ 明日葉を入れて祝ひぬ雑煮餅
さ 散弾銃入れしケースの注連飾
き 金銀の餅花に酔ひ少しあり
ゆ 湯を熱く張つてくれたる初湯かな
め 目を付けてありし若菜を摘みにけり
み 蜜柑すつぱし正月の昔話
し 新年号飾り恵方としたりけり
ゑ 海老で鯛釣れるや知れず残り福
ひ 日の本の印南富士なる初景色
も 門前に火を焚いて初詣かな
せ 千歳やおほみやしろの初神籤
す すぐろくの躍り上がつてゐたりけり

雪嶺抄

秋の声

笹村 政子



落鮎や錦帯橋に小糠雨
海わたる蝶のきてをり藤袴
椿の実城のかたへに登り窯
初しぐれ窯より高き薪の嵩
蔓引かばあらぬ通草のゆれにけり
水影の芙蓉の紅の濃かりけり
芙蓉の美人呼ぶ音をたてにけり
やや早きひとりの夕げ秋の声
夫逝きし日ごと厨の水澄めり
新酒酌む子にまかせたきことあまた

高華抄 葉 騷 佐津のぼる



色鳥来葉騷の梢に見え隠れ
帰る日の燕の並ぶ送電線
雨のまだ乾かぬ空へ燕去る
空へ逃げすぐ群なせる稲雀
青空に鳴る桐の実を仰ぎけり
芋の葉のほろりと露をこぼしけり
山の端もくまなく澄める望の空
名月の影踏むあそび塾帰り
音たてず椅子ずらしたる月の客
ジーパンのごはごはが好き草風

天高し明石大門の橋の上

北村ちえ子

天高し明石大門の橋の上

女子会の話がつきて根深汁

バス道や一日にして紅葉せる

秋の雨どんぐり袴はづれけり

一周忌また雨やねと秋霖雨

てんたかしあかしおおとのはしのうえ きたむらちえこ

「明石大門」とは明石海峡のこと。海峡に架けられた明石海峡大橋は全長3911メートル、中央支間1991メートルで世界最長の吊り橋。秋の澄んだ青空と青い海の空中に架かっているのだが、青い空よりも、もっと高い宇宙ちかくに浮いているように感じさせるのは句の力。また夜は七色に変化し、銀河鉄道に見える。いずれにしても夢の架け橋と呼ばれるその雄大な景色を無心でズバツと詠んだ。ちえ子は一時病気で句を休んだこともあったが回復し、今は神戸の北区から句会にも熱心に参加している。

雪卿集 せつけいしゅう

九月尽

志方 章子

唇

藤生不二男

九月尽季寄せ片手に入院す

唇のほころびきたる菊師かな

消灯の時刻夜長の宵の口

仰ぐとき唇ゆるぶ踊笠

秋冷の身を去りやらぬ微熱かな

唇のゆがむ写楽や通草の実

遙かなる海にも見えて秋の雲

唇に笛をかまへり秋祭

キリストの肋骨ならむ鱈雲

くちびるの触れて秋海棠の紅

毎日よ病院食の秋茄子

唇に箸をはこべり菊脛

秋の雨見舞の夫の杖の音

唇の渴きに覚むる野分かな

鱈雲ピンクに染まる頃帰る

くちびるのふたたび濡るるこぼれ萩

石叩

出口 誠

天高し

永田万年青

秋の夜のしじま破りて救急車

天高し川底の砂利煌めいて

石叩川のほとりを飛んでをり

をみな坂果てまで行きぬ酔美容

止まりても翅動かして秋の蝶

沢蟹の小川の縁を見え隠れ

縄張りを争ふ蝶に秋の昼

樽高く打つて男の秋まつり

じわじわと攻めてしつこき秋の風邪

眼を閉ぢて肩まで浸かる虫の宿

真白なる天井にらむ秋の昼

秋高しぐいと斜めに門の松

横たはり電灯を見る秋の暮

鍵穴を探りてゐたる秋の暮

秋雨に落ちついてをり瓦屋根

鶴鴿の番い走りて離れけり

水路閣

升田ヤス子

白川の速きに乗れり初鴨は

秋まつり渡御の子の声山下る

尼寺の祭の障子閉めらるる

秋祭りお旅所掃いてばかりなる

澄む水の音の激しき水路閣

水路閣秋の夕照届かざる

三門の苔の中より末枯れ虫

路地に子の溢れてゐたり秋落暉

雪樹集



新酒

谷口 一献

唇のしつぱり濡るる新酒かな
下唇噛みて見上ぐる秋夕焼
酔ふほどに語らふほどに秋深し
屁放虫いつも近くに誰か居る
右踵ばかり減りをり秋の暮
セピア色の小樽運河に月かかる

新米

溝淵 弘志

彼岸花子供四人を育てけり
地球儀を見つめて秋の夜は更けぬ
秋祭孫にせがまれ肩車
新米と聞いて見とれてしまひけり
夜食とる腹満ぶくの夜長かな
虫の音や駅から自宅鳴き通す

杉苔

延川 五十昭

野ざらしのチンチン電車石路の花
掃き寄せし松葉にまじる紅葉かな
休診の齒科の看板薦紅葉
桃割れの髪に八重歯の七五三
少年の釣り逃がしたる紅葉？
杉苔に紅葉一枚南禅寺

瓢箪

住田千代子

無花果を煮詰める雨のひと日かな
ひとつ見て辺りにつぼむ曼珠沙華
目隠しの窓に瓢箪くびれをり
瓢箪の風にころころ踊りけり
暮れ時をどんより葛の花匂ふ
葛咲くやくぐり抜けゆく川の音

通草

廣畑 育子

棒稻架に沿ひて咲きたる嫁菜菊
秋耕の腰に手をやる男かな
川の爺独り占めかな秋の鮎
雨あとのグラウンドを染め秋夕焼
光る波溢れて寄せる萩の池
葉を添へて売らるる通草道の駅

蚊食鳥

田尻 勝子

山影の池の上飛び交ふ蚊食鳥
秋天に漁船浮く丘に住み
飯食へば淋しさの果秋の果
鳥の餌の一握温し今朝の秋
大笑に唇裂けてより冬
ひつつき虫付けてリハビリベッドかな

長靴

赤松有馬守破天龍正美

楓の実くるくる舞うて溝に落つ
飛蝗跳ぶ草の闇より音立てて
芒の穂闇を払うてをりにけり
赤のまま活けて訛りのなつかしき
長靴を履いて先祖の墓洗ふ
西海のざぼんに似たる秋落暉

みささぎ

平居 滯子

月を得て陵の形きはやかに

噴火口見えて花野の尽きにけり

発掘の地にうづくまり秋の声

墳の跡運動会の湧き立てる

天窓の秋の日を追ひ背泳す

百獣の王も秋思の只中に



蛩雪譚

三十年一月号から

(抜粋)

冷泉 花

秋の夜の塗り終りたる爪の闇

今月は闇を詠んだ。これはたしか句会の兼題として出したもので、心の闇を塗り終わった爪に象徴している。爪を磨いたりするのは、第三者を意識しているオシヤレの一つであるが、化粧も同じで、塗り終わってみると、塗ったところで何になる？とふと疑問が湧いてきたのだろう。いわゆる根源の無知で仏教哲学で言う（元品の無明（がんぼんのむみよう）。人は何気なく過ごしているうちに、ふつふつと沸く疑念の闇が現れてくるのである。そこを詠んだ。

大内 幸子

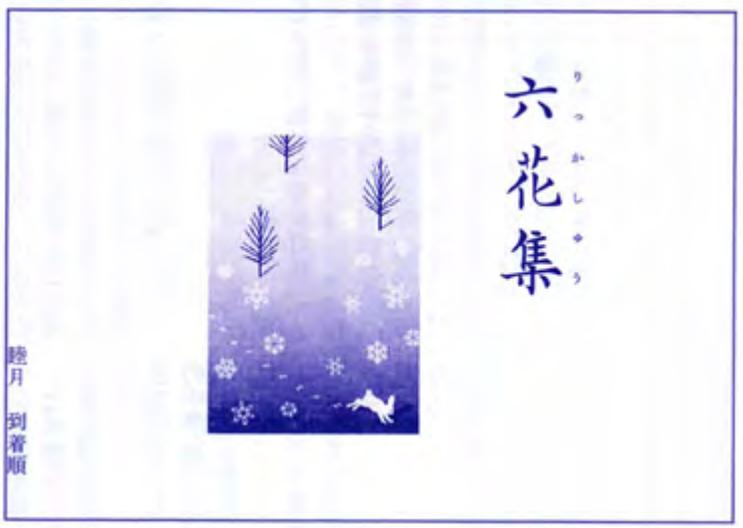
窓開けて霧に隠れし高架駅

幸子の住む山里の鉄道はどんな高架が進んで、カーブが緩くなり到達時間も短縮されてきた。便利になった代償に景色がだんだん殺風景になってくる。今朝は露と霧に包まれてそれらが見えないが、それも乙な趣があることよと感じているのである。幸子は長年身辺俳句を淡々と詠んで来た。が、最近高齢によつて俳句も詠めなくなってきたと電話があつた。九十歳百歳で俳壇をリードしている俳人もいらっしやる。俳人に定年はないのである。頑張つて欲しい。

小林はじめ

障子貼る手さばき枯れし爐かな

枯れるというのは、何も悪いことでは無い。「筆が枯れる」などと言い、若い頃の毒気も抜けて味わいのある筆法を身につけた人のことであり、個性的なことである。この句の夫人も年齢を重ねて見事な手さばきで障子を貼り替えているのである。慣れると言うことは無駄を省けるようになったことで、歳を重ねていくのも佳いものである。はじめさんの句も枯れて味わいが出て来たのである。



延川 笙子

有馬富士見おろす坂の木下闇
夕闇の庭の木犀香りたつ
夕闇に甘き香りの稲穂かな
草闇にひそむ秋の蚊夫を刺す
夕闇の睦明るうす彼岸花

冷泉 花

女郎花笑顔の奥の消せぬ闇
秋の夜の塗り終りたる爪の闇
破芭蕉破れかぶれの闇の中
テイクタイム長し宵闇いつのまに
葛の花思ひめぐらす日暮れかな